会員投稿

走馬燈 (1)

桐生市　穴原保二

◎はじめに (1)

事務局より突然の投稿要請があり最初戸惑いがありましたが、たまたま三菱電機の定年が近付いた頃から自分史を纏めようと思って書き始めたものがあったので投稿する気になりました。

私たち、世間でよく言われる昭和一桁の人間は「明治、大正」の人たちの考えていることも理解できるし、また戦後生まれの人たちの考えていることも理解できてしまう。良く言えば「頭が良く、理解力のある昭和一桁人間」ということになり、悪く言えば「どうにも、掴みどころのない昭和一桁人間」ということで、世間一般では片付けているようだ。

このことを思い「昭和一桁人間」の一人として、私はこのような「育ち方、生き方」をしてきたのだということを残せたらと思いつつ、暇を探しては書き始めました。

書き始めると、なぜか「大東亜戦争」が始まった小学三年生ごろから、戦争末期の小学六年生の、あまりにも変化が大きく心に刻み込まれた頃から書き始めてしまいました。特に私は近所で評判の悪餓鬼で、母親には迷惑のかけ通しのため、母が「お前はついでに生まれてきたのだ」とよく言われた、私の一面を覗いてみていただければ幸いです。

昭和１６年１２月８日、「第二次世界大戦勃発」し、最初は戦争になっている実感はあまりなかった。ただ貯蓄の奨励が激しくなり、昭和１８年８月頃からは隣組の大人たちが防空訓練を時々するようになってきた。学校でも学生服の配給制度や運動靴も買えなくなってきた。タバコも朝４時頃から兄弟で手分けして「タバコ屋」の前に並び、後から親たちが駆けつけようやく一箱買えるようになり、世の中がなんとなくオカシクなってきた。

昭和１９年の春頃から、朝学校に行くと毎日１時間目の授業から、先生が必ず南洋方面でのわが軍の戦果およびソロモン海戦等を話すようになった。先生の話が、いつの日にか本土決戦があると言うようにもなってきた。信じられないかも知れないが「竹槍」で戦車に立ち向かおうと思っていたのだ。最近のテレビで見る「北朝鮮の小学生」も同じと思う。

５年生の時からブラスバンド部でトランペットを吹いていたので、海軍軍楽学校へ無試験で入学できる教育課程の修了書も持っていた。このため朝はトランペットを吹いて桐生駅まで出征兵送り、午後は桐生駅まで遺骨迎えに行く。１週間に送りは３回ほど、遺骨迎えは１２月より１週間５回はあった。６月に駅まで送った兵隊が１２月には遺骨で帰ってくる人もいた。戦争の激しさがよくわかった時期であったようだ。

（つづく）

会員投稿

走馬燈(2)

桐生市　穴原保二

◎はじめに(2)

敗戦により世の中が「ひっくり返り」今まで使った教科書は、先生の読み上げるページを墨で消し込むため、役に立たない教科書になってしまった。新しい教科書もなく、新聞紙の大きさに印刷された数学等の教科書が４人に１枚配給になる。それを折ってハサミで切り使うのだ。人により持っている教科書が違うのである。これで勉強ができるわけがない。音楽の時間は先生が赤旗の歌を教える（聞け万国の労働者、である）。

この頃から私は学校へはあまり行かず「闇屋」の商売をしていた。東京へタバコや味噌を売りに行くのだ。電車に乗って行くのだが、途中で警察の検問にあうと全部巻き上げられる(食べられるものは売買禁止であった)。この他塩の買い出し、落花生、さつまいも、米、魚、タバコの葉、なんでも「買い出し」に行った。また売りにも行った。ヒロポン、拳銃、野球のバット、織物、干し柿、ノリ、魚。商売になる物はなんでも売買したこの時期が、私にとって一番変化があり、波乱万丈の毎日だった。

このような体験で今日の私があると思っている。

書くにあたり、様々なことが次々と浮かぶようになり「自分史」の題名を「走馬燈」とし書き始めたものを、今回は笑われるのを承知で一部分だけ投稿させていただきました。

◎空襲警報(1)

毎日毎日、米軍機による本土空襲が続き、学校に行くのも嫌になっていたある日の話（現代の登校拒否と似てる）。

今日もまた８時半頃、登校途中で空襲警報のサイレンがけたたましく鳴り出した。なぜか近頃、時々考えていた米軍による生品飛行場の爆撃が、この日はあるような気がした。約５㌔の道程を学校に行かず、仲間３人を引き連れ、茶臼山へと急いだ。山に辿り着いて飛行場の見える松の木を探し、よじ登って待つこと１時間ほどすると、西の空赤城山方面にトンボのように小さいグラマン機が、まるで秋の空に雁が飛んで行くようにカギの手となり、１編隊５機で３編隊飛んでいるのが見えた。

不思議とこの時はキレイだなぁと思い、米軍であることを忘れていた。ボヤとしてふと飛行場の方へ目を落とすと、日本兵が慌ただしく走って駐機してある戦闘機の方へ行くのが見えた。１機また１機と飛び立って行こうと、滑走路の方へ行くのが手に取るように見える。いよいよ空中戦になると思い、ワクワクするやら、怖くて身体が震えるやら、胸がドキドキし鳥肌が立ってきた。

２、３機飛び立った頃、西の空からグラマンの腹が銀色にキラリと光り、一気に飛行場を目がけて、ワシが空から獲物を狙う如く落ちて来るのが見えた（なにかわれわれ悪餓鬼どもを攻撃して来るように見えた）。松の木にしがみついて見ていると、すぐ頭の上をグラマンが横切って行く。見ると飛行機の中に２人乗って、こちらに手を振っているようにすら見えた。

（つづく）

会員投稿

走馬燈(3)

桐生市　穴原保二

◎空襲警報(2)

「グラマンの機銃掃射のはじまり、生まれて初めて見る戦争だ」飛行場の方を見ると、飛び立ち遅れた日本機めがけて、ダダ・・ダと砂煙が一直線で走り、飛行機に近づくとポッと黒い煙と炎になり、日本軍の飛行機が燃えている。次々とグラマンが突っ込んできては舞い上がって行く。そのたびに日本軍の飛行機が燃え出す。

グラマンの操縦士にも機銃掃射のへたな者もいる。木の上から見ていると半分は飛行機に命中しない。この間長く感じたが、１０分程度だったと思う。機銃掃射も終り、グラマンが西の空へ飛び上がり、また編隊を組んで南の方へ飛んでいってしまった。

グラマンが見えなくなった頃、日本軍の飛行機がどこからともなく、１機また１機と舞い降りてきた。空中戦をするために飛び立ったものと思っていたら、機銃掃射をされないために逃げ出した飛行機だった。この時、日本は戦争に負けると子供ながらに確信した。

家に帰り、母に今日の出来事を話すと「今日見てきたこと、戦争に負けるなど絶対に学校や他人に話してはいけない」と言われた。もし話したことがわかると憲兵に親が連行されるのだ。でも、ついこの話をある１人の学校の先生にしたところ、目を輝かしてよく話を聞いてくれた。叱られると思ったら叱られずに済んだ。

その先生も今は亡き人となってしまった。

◎松飾り

昭和１７年元旦の朝、５時頃目が覚めた。布団から出るのは寒くて大変だ。でも身震いしながら布団から出て、綿の学生服をきて、その上に兄貴のお下がりのオーバー（従兄弟のお下がりである）を羽織り、足袋を履き、下駄履きで家を出た。持物は米の一斗袋１枚である。

母に見つからないように、そっと勝手口から表に出た。外はまだ真っ暗闇だ。この季節でも私のような一般家庭の子供は、手袋など買って貰えない。だから鼻水が出ても手の甲でこするため、ほとんどの子供は手にヒビやアカギレを切らしていた。

オーバーのポケットに手を入れ、襟を立てて集合場所に向かった。寒さのあまり身震いがし、歯も良く合わずガタガタ震えながら急いだ。まだ朝も早いので、凍りついた道を下駄履きで歩くのは大変だ。

集合場所に着くと今日のリーダー、朝鮮人のシノ（名前である）が、みんな集まれと指示する。独特の朝鮮語と日本語とのチャンポンで実行計画を説明し、いよいよ出発である。

今日の予定は、松飾りに付いているミカンを、１町内全部外してしまうのである。いささか、いくら悪餓鬼の俺でも、今日のイタズラはあまり気が進まない。しかし同じ悪餓鬼仲間、気おくれするわけにもいかず、どうにでもなれの気持ちで出発した。

考えてなくても、正月用松飾りのミカンを盗むのは誰が聞いてもまずいし、神様・仏様もきっと怒るはずである。こんな悪いことはさすがの俺も生まれて始めてだ。

目的の町内に着いた。打ち合せどうり身長の大きい者が小さい者を肩ぐるまにして、各家の玄関にある松飾りのミカンを外し、下にいる者は米袋の中にミカンを詰める。このような手口は悪餓鬼グループには簡単なやり口だ。それでも１町内約５０軒も盗るのは大変であった。音のしないように、そっと竹串に刺してあるミカンを荒縄から串ごと外し、下にいる受けとり役に落とす。受けとり役は受けとったミカンから、竹串を抜き取り、米袋にミカンだけ入れる。

今の時代と違い、犬を飼っている家は幸いなことに１軒もなかった。当時のミカンは大きく、今の倍ほどの大きさはあった。かれこれ米袋２杯になったので、リーダーの指示でこれで止めることにした。打ち合せ通りの場所に一時隠すこととし、ひとまず解散し、朝１０時に渡良瀬川の河原に集合することになった。

予定時刻に渡良瀬川河原に集合し、ミカンも２袋届いた。このミカンをどう処分するのか各人の言い分があり、なかなかまとまらなかった。

最後に決ったのはミカンの遠投であった。ミカンの遠投と言っても、２袋も川に投げるのは大変であった。あんなに苦労して盗ったのに、全部川に投げ入れたのである。なんとバカげたことだろう。

でもこの時はなぜかいい気持ちだった。当時ミカンを食べたくて盗ったのではなく、今考えてみれば、たんなるイタズラなのだ。現代ならば新聞沙汰だろう。

この時のリーダー、朝鮮人「シノ君」は、終戦後韓国へ引き揚げて行ってしまった。最近わかったことだが韓国で大学教授をしているそうだ。（つづく）

カラオケ愛好会から、参加費値上げの「お知らせ」

カラオケ愛好会は、発足当時から参加費１人あたり２，０００円で開いてきましたが、いままでの飲物・食べ物の質と量を維持していくのが、だんだん難しくなってきてしまいました。（そして予備費も少なくなってきました。）

そこでカラオケ愛好会役員および菱の実会幹事会にて打ち合せの結果、やむを得ず平成１０年３月より参加費を１人あたり２，５００円に値上げすることになりました。ご了承いただくとともに、今後もより一層の参加をお願い申し上げます。

会員投稿

走馬燈(4)

桐生市　穴原保二

◎ブラスバンド

私の家の前の宇敷さんの叔父さんが軍隊ラッパを持っていて、時々貸してもらい吹いていた。確か小学校４年生の頃だったような気がする。このことが後で私の人生に大きく係わることになるとは思わず、時々ラッパを借りては吹いていた。

近所の大人にラッパが吹ける人がいて、時々軍隊ラッパのメロディを教えてもらった。進軍ラッパ、起床ラッパ、就寝ラッパ、いろいろ吹いてもらい、それを耳で聞いて覚えるのが一苦労だったのを今でも覚えている。

第二次世界大戦がだんだん激しくなった小学校５年生の５月初夏の頃、学校内にブラスバンドができる噂を耳にした。私も聞き流していたある日の午後、同級生の誰だったか思い出せないが、教室に走り込んできて「今、ブラスバンド部員を探している」と言われ、どのようなことをするのかとフラリとテスト教室に行った。

先生が一人一人トランペットを吹かせ、音が出なくてもやる気のある人は管楽器以外の小太鼓、大太鼓、シンバル、タンバリン等に組み分けしていた。私もトランペットを吹かせてもらった。当然のことながら自分でもびっくりするほど良い音が出た。先生は「おい穴原、おまえはトランペットを吹け」と言われた。考えて返事をしないでいると「何を考えているのだ」と一喝され、否応なくブラスバンドに入れられてしまった。

もうひとつ私なりの理由をつければ、ブラスバンドに入れば当時ではあまり見られなくなったオヤツが出るのだ。婦人会の叔母さんたちが持ち寄ったジャガイモをゆでて出してくれる。またゼリー状の甘い角型の菓子を出してくれた。ジャガイモ等はこの頃とても庶民には入手できなくなり、ましてやゼリー状の甘い角型の菓子など入手できる等とても考えにくい時期に貰えるのは何よりの魅力だった。このようにして、私とトランペットの係わり合いが始まったのは私の食い意地が人一倍あったからだろう。

初めのうちは練習もあまりつらくなかったが、戦禍が激しくなるに従い、戦場に青年が徴兵され出征する人が増えてきた頃から、激しい練習の明け暮れとなってきた。太鼓を叩く人は明けても暮れても机の蓋をカタ、カタと叩いていた。小学校５年生で一挙に上手になるはずもなく、毎日夜の７時過ぎまで猛練習が続き、この時私は大変なものを始めてしまったと思ったが後の祭りだ。

練習も日増しにきつくなり、トランペットを吹いている私も例外でない。時には唇や歯ぐきから出血することもあった。これがもとで私はちょうど歯が痛んだときも歯医者も行けず治療せずにいたら、とうとう八重歯ができてしまった。でも当時は歯が痛いなどとても先生に言えず辛い日々が続いたけれど、八重歯のお蔭でトランペットのマウスピースがぴたりと唇に合い、トランペットを歩きながら吹く場合吹きやすくなり、あとあと楽をしたのである。

トランペットや太鼓、クラリネット、トロンボーン、大バス、（次ページへ）

（前ページから）　小バス、コルネット等、みんながそれぞれ練習に励んでいたが、やがて練習だけでは飽きた頃、私がみんなを集め軍艦マーチを演奏しようと提案し、先生に内緒で演奏を始めたが、軍艦マーチ演奏どころか全然曲にならず、ただプカプカ吹いているだけでうるさいだけだった。たちまち先生に見つかり、提案者の私が大目玉を食うことになってしまった。

でもこのことで私たちは練習曲だけでなく軍歌を演奏することが早くなり、みんないままで以上に練習に励むようになり、結構楽しい練習時間となったのである。(終)

◆ おしらせ ◆

１．４月のグラウンドゴルフ月例会

●日　時　４月27日(月)　午前９時より　●会　場　利根グラウンドゴルフ場
●その他　参加希望者は直接会場へ

２．５月のカラオケ月例会

●日　時　５月11日(月)　午後５時より　●会　場　睦荘　ＹＯＵ遊ホール
●申　込　愛好会役員（小塚さん：☎0276-31-7894）まで

３．４月の「囲碁」入門講座

●講座日　４月13日(月)・20日(月)　午前１０時～１１時３０分
●会　場　体育館　余暇開発室

４．５月の幹事会

●日　時　５月11日(月)　午後４時より　●会　場　組合　会議室

編集後記　● さくらの花とともに新しい年度を迎えました。当分は初々しい小・中学生をはじめ、学生や新社会人が目につきそうです。

● 馬電菱の実会でも、４月２２日の総会・懇親会に向かって大勢の会員の皆さんに参加いただきたく、役員一同着々準備中といったところですが、まずは同封した返信用はがきを早めに投函願います。

● 穴原さんの「走馬燈」の原稿はもっと長いのですが、今月号で一応終了にさせていただきます。愛読ありがとうございました。　（下山）

発　行　　発行責任者　斎藤　慶蔵　　三菱電機労働組合群馬支部
1998-4-6　№60　　編集「菱の実会だより」編集委員会　　電話　0276-52-3874